

災害復旧事業によせて

台風23号災害復旧事業に寄せて



豊岡市長
中 貝 宗 治

オオサンショウウオ出石川に帰る

2008年3月2日、豊岡市の高橋小学校の子どもたちによって、オオサンショウウオが次々と出石川に放されていきました。2004年の台風23号で出石川の上流から中下流に流されたオオサンショウウオ413匹が兵庫県によって保護され、ニジマスの養殖場に疎開して、出石川の復旧を待っていました。この日行われた兵庫県の災害復旧・復興事業竣工式に合わせて、式典会場の小学校前で79匹の放流が行われたのです。昨年11月16日の70匹に続く2度目の放流でした。今後は出石川の再生の状況を見ながら、残りも順次放流されていく予定です。

出石川の災害復旧にあたっては、これらのオオサンショウウオや魚が棲家とすることができるように護岸に魚巣ブロックが設置され、また移動を容易にするように傾斜式落差工が採用されるなど、様々な工夫が凝らされています。

円山川・出石川等の国土交通省直轄部分の災害



魚巣ブロック（兵庫県提供）



扇型魚道（兵庫県提供）



出石川に帰るオオサンショウウオ

復旧は既に終わり、再度災害防止の観点から激甚災害対策特別事業が進められていました。民間アパートを利用した応急仮設住宅も2006年11月末をもって解消し、学校、市民会館、下水処理施設、道路、河川、農地、農業用施設等の豊岡市が担当する災害復旧事業も、2007年8月末をもってすべて終了していました。そしてこの日迎えた兵庫県事業の竣工で、台風23号による災害の復旧事業が

文字通りすべて完了したことになります。

兵庫県は、災害関連事業に加え、被害の著しかった出石川において2箇所の災害復旧助成事業を行っていました。これは、通常の災害復旧が当該場所・地点を直すものであるのに対し、現状復旧だけでは再度の災害に備えることが不可能である場合に区間を決めて一体的に改良するものです。兵庫県の事業が豊岡市の復旧事業に比べ時間を要したのはそのような理由からでした。

私たちは、長く苦しかった復旧の道のりを思い、感慨とともに、古巣へと帰っていくオオサンショウウオを見送ったのでした。

台風23号災害

それは、恐ろしい災害でした。

2004年10月20日、台風23号は円山川流域に記録的な大雨をもたらし、市内全域で土砂災害、道路の寸断、河川の崩壊、家屋の浸水などを引き起こしながら、支流の濁流を集中させて円山川と出石川の堤防を決壊させました。誰も経験したことがないほどの増水のスピードでした。私たちは翻弄され、まちは泥の海に沈みました。

死者7名、負傷者51名、住家の全壊、大規模半壊、半壊、一部損壊、床上浸水合わせて5,164世帯、災害ゴミ36,022トン。その数字の背後に、市民の途方もない苦しみがあったのでした。

油断、機能不全、支えあう人々。あの災害の経験を短く表現すると、この3つの言葉に集約できます。そこには、私たちの痛恨の思いと教訓と希望が込められています。



まちは泥水に沈んだ（撮影：兵庫県消防防災航空隊）



堤防決壊により水流に押しつぶされた家屋

失ったものは何か

あの災害で、私たちは何を失ったのか。

木々はなぎ倒され、野山は崩れ、田畑は泥で埋まり、道路や川は壊れて、海もゴミで覆いつくされました。そして市民の大切な命と日常も失われてしまいました。

朝起きて、家族で「おはよう」と声をかけ合い、ご飯を食べ、「行ってきます」と言ってそれぞれの仕事や学校へ出かけ、また帰ってきて夕飯を食べ、テレビを見ながら団欒をして床に就く。その何の変哲もないごくありふれた日常が失われて初めて、私たちはそのかけがえのなさに気づいたのでした。

住宅は失われ、仕事や学校に行く道も途絶し、護岸は壊れたままで、職場も学校も被災して動きませんでした。人々は突然、普段の「見慣れた景色」から「見慣れない景色」の中に放り出され、大きな不安と激しいストレスに苦しんだのでした。

災害ゴミも大量に出てきました。市民は、頭の上からつま先まで泥だらけになりながら、家の中のゴミを運び出しました。しかし、それらは、本



集められたゴミの山

当はゴミではありませんでした。あの台風に襲われるまで、市民の日々の暮らしを支えた家財道具であり、心と思索を支えた書籍であり、思い出の詰まったアルバムなどでありました。それらは経済的価値に着目すれば「財産」であり、災害によってその経済的価値が失われたわけですが、それだけではありません。市民が失ったのは、それらに支えられた「日々の暮らし」でした。

災害復旧事業の目的は、直接的には失われた機能の回復ですが、真の目的は人々の日常の回復にあるのだと私は思います。

被災地責任

すべての災害復旧事業が終わった今、私たちは確かに立ち上がってきました。立ち上がったのは、私たち自身です。何よりも先ず、災害と立ち向かい元の姿を取り戻した市民の不屈の精神と頑張りと支えあい・助け合いに敬意と感謝を捧げます。

しかし、私たちは、自分たちだけでそうできたわけではありません。国、県、市町村、そして全国の多くの方々への支援と励ましを受けて、立ち上がってきました。おかげさまで復旧を成し遂げることができました。国や兵庫県が自ら災害復旧に全力をあげていただいたことも大変ありがたいことでした。

とするなら、私たちはご恩返しの意味も含めて、私たちの経験、失敗と成功、反省と教訓について全国の人々に発信する被災地としての責任があります。豊岡だけではありません。災害列島と呼ばれる日本において、毎年のように大災害が発生し、苦しみ、そして再び立ち上がっています。過去の被災地は、それぞれの教訓を共有化する責務があります。昨年、豊岡が実質的事務局となって、激甚な水害経験を持つ自治体に対し、現場で得られたノウハウ、反省、教訓についてアンケート調査を行いました。そして内容を整理・分類して1冊の本にまとめ、「水害現場でできたこと、できなかったこと 被災地からおくる防災・減災・復旧ノウハウ（水害サミット事務局編、ぎょうせい）」とし



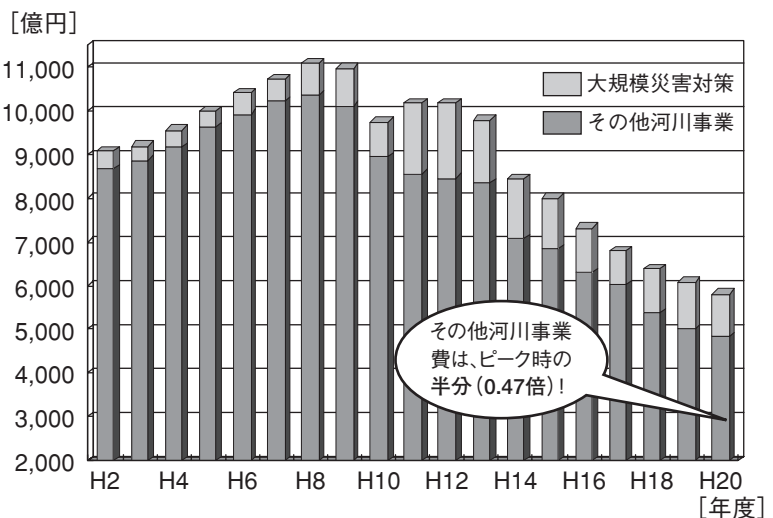
浸水深とその怖さを伝える



て出版したのも、そのような考えに基づくものでした。

予防的対策の充実を

毎年のように発生する大水害に対し、被災地の復旧と再度災害防止のための対策は、近年相当しかりとなされるようになっていきます。このことは大変評価できるところです。しかし、残念なこ



国の河川事業費の推移 (維持修繕費を除く)

とに、わが国の河川整備費は年々縮減される傾向にあります。しかも、その枠内で被災地への対策が行われるため、結果として予防的対策費が減少するという極めて憂慮すべき事態となっています。平成20年度の予防的河川整備費は、平成8年度のわずか47%です。極端な言い方をすると、被災しないと治水対策が行われないといった情けない状況に陥りつつあります。

幸い豊岡では、激甚災害対策特別事業で円山川水系の治水事業が急ピッチで進められていますが、本当のことを言えば、その姿をあの災害の前に見たかったというのが正直な気持ちです。事後対策より予防的対策のほうが、はるかに効果的・効率的であることは言うまでもありません。

予防的対策の充実を強く求めたいと思います。

大河川の管理は国で

最近地方分権推進の議論の中で、一つの都道府県内を流れる1級河川の管理は都道府県に任せるべきであるとの意見が出ています。しかし、あの恐ろしい災害を経験した立場から言えば、そのような考え方はリアリズムに反しており、賛成できません。

全国では毎年のように大規模災害が発生しており、大規模災害は日本全体としては決して珍しいものではありません。しかし、個々の被災自治体にとっては、多くの場合初めての経験か、久しぶりの経験です。自治体で働く個々の職員から言えば、その発生度合いはさらに小さくなります。大規模災害は、国にとっては毎年のように、都道府県にとってはたまに、市町村にとってはごくまれに起きている、と言えます。このことは、大規模災害対策の経験とノウハウ・人材が市町村よりは都道府県に、都道府県よりは国に集積しうることを意味します。

同様のことは予防と復旧の資金需要についても言えます。大河川がひとたび氾濫すると被害は莫大なものとなり、事前・事後の対策も大きな費用を要します。

河川の日常的管理と整備、災害時の対応、そして災害復旧は連続的・一体的であることが防災・減災の実効性の観点から重要であり、当該河川にかかる災害対応ノウハウ・人材と費用負担能力に

応じて管理権限の配分がなされるべきです。ノウハウ・人材と資金力に明白な差がある以上、より多くのノウハウ・人材と費用を要する河川の管理は、引き続き国においてなされるべきです。大河川を甘く見てはいけないうし、机上の理念は、自然の脅威の前では何の役にもたちません。

交通ネットワークの整備は急務

台風23号による大水害に際し、豊岡は全国各地から救援・援助をいただきました。消防の援助隊を万歳で迎え、手を合わせて見送った市民もいました。道路は大規模災害時、「助けに行く道」であり、「助けに来てもらう道」でもあります。

それだけではありません。阪神・淡路大震災で日本の交通は大打撃を受けました。新幹線も山陽本線も私鉄も高速道路も主要国道も被災地に集中していました。東西交通がかろうじて保たれたのは、JR播但線や山陰線、国道9号や播但連絡道路、伊丹空港等があったからです。台風23号でも、自衛隊が姫路から豊岡を目指してやってきましたが、一般道路が冠水し手前で足踏みをしていました。豊岡に辿り着けたのは、その数年前に整備されていた円山川の桜堤の上を通ることができたからでした。

南海、東南海、東海地震が30年以内に起きる確率が極めて高いと言われていています。首都直下も同様です。そのときは被災地のみならず、交通途絶によって日本中が大打撃を受けるだろうと思います。

被災地に救援に行く「道」、被災地を迂回して東西交通・南北交通を確保する「道」、そのいずれに関しても、「あれがだめでもこれがある」と



駆けつけた緊急消防援助隊

いう多様でしなやかな交通ネットワークの構築を急がなければなりません。

道路財源に関して、そもそもどのような道路がどれだけいるのか、という本来の議論が国会においてほとんどと言っていいほどなされず、政党が政争の興奮にとりつかれたような対応で時間を浪費したことは極めて残念であり、腹立たしい限りでした。

危機管理の「道」のあり方について議論が深まることを期待して止みません。

復旧のシンボル

コウノトリが円山川復旧のシンボルであったとすると、オオサンショウウオは出石川復旧のシンボルでした。

2007年5月20日、日本の野外では43年ぶりにコウノトリのヒナがかえり、7月31日、46年ぶりに巣立っていきました。場所は、円山川の堤防決壊現場のすぐ近く、豊岡最大の水田地帯である六方田んぼに設置された人工巣塔でした。円山川の改修は進み、合わせて実施されている自然再生事業



円山川でひと遊び



やっぱり 出石川がいいな

画像提供 県立コウノトリの郷公園



「命への共感」を覚える子育て



青空をバックに巣立ちの瞬間

によってできた川の浅瀬にはコウノトリが舞い降りるようになっていきます。

他方、兵庫県は再びオオサンショウウオが出石川で生息できるように環境対策工法を進めてきました。

子どもたちの環境教育・ふるさと教育の絶好の機会だとして、観察会や生きもの調査なども行われてきました。

西日本にしか生息していないと言われる世界最大の両生類であるオオサンショウウオが大量に生息していたということは、被災前、出石川の自然がいかに豊かなまま残されていたかを物語るものです。しかし、災害と復旧工事によって一度傷ついた自然がどこまで回復するのは、まだ分かりません。オオサンショウウオの「日常」がどこまで戻るのか、私たちはオオサンショウウオを出石川の「復旧」のシンボルとしてこれからも見守っていきたくて考えています。